

# 兼好の周辺（補遺）

鎌田元雄

## 一 ト部系図について

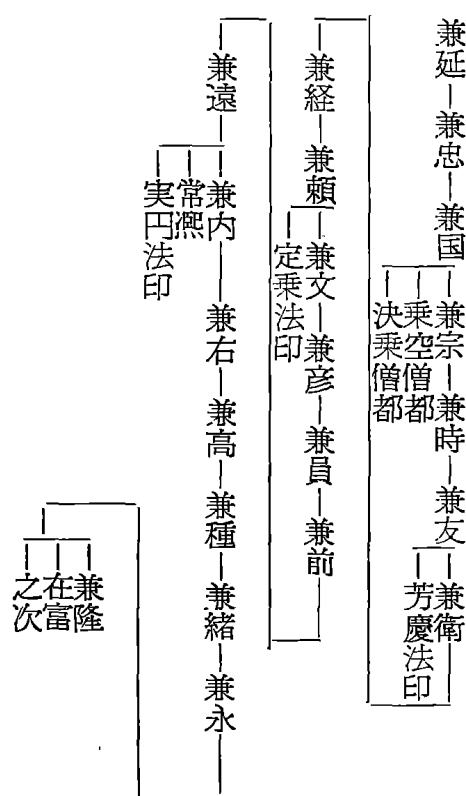
吉田神道の教義の上からはどうしてもなくてはならぬものでありしかもその生命ともいえる唯受一流血脈がト部系図の原型ではなかっただろうか。

それはト部兼俱（一四三五—一五一一）筆とされている唯一神道名法要集にすでに付載されており、ここで平鷹を接点として中臣氏系図と結びつけたト部系図がはつきりとあらわれてくる。平鷹は実在の人物であるが、中臣氏の系図にはその名を発見できない人物であり、それを中臣氏に結びつけたのはあきらかに偽瞞であることは弁ト抄の度会延経をはじめ多くの学者の指摘しているところである。しかし、そのなされた時期はいつ頃であるかという点になると吉田神道成立の時期を知るためにも必要なことであるが、残念ながらはつきりしたことはわからない。それをト部兼俱によってなされたものとする従来一般の見方に対して西田長男氏は少なくとも康応元年（一三八九年）兼熙の時代にはすでに完全に成立していたとされている。（「吉田神道成立の時期」）

これよりかなり時代は下るが、兼右の天文十一年（一五四二年）

防州下向記六月廿六日の条に、平野三位兼永は名法要集の唯受一流血脈より吉田流を削除し、之に自家の家督を附載して、平野流を以て唯一神道の正統であると唱道している由を京都より聞及んだので取寄せて披見したところが、次の如きものであったとして

コレヨリマヘハ無相違



という系図をのせている。釈日本紀の著者として著名な兼方の名が見えず、尊卑分脈には兼尚となっておりるところを兼高としているので多少の違いはあるがほぼ同じであると見てよい。この「兼永は兼

俱の三子で、兼右には叔父に当り、家を出て同族の平野兼緒の後を嗣いだ人」で「兼俱自筆稿本の血脈によれば、兼俱の下に明かにその名を見出し得られ、之を相伝したのは疑うことを得ないが、唯一神道の道統に就て兼右と競望を企てたにより、上記の如き新義の血脈を作り出したものと思はるる。」（吉田叢書第二篇解説）とあるように、同族の中でも最も血のつながりも深く、関係の深かった平野流と吉田流ではしょっちゅういざこざがたえなかった。そのためにもはっきりした系図が必要であつたと思われる。

萩原龍夫氏がすでに指摘しておられるように、恐らく平野流が本流で吉田流は傍流ではなかつたかと思われるふしがある。しかし南北朝の頃から兼熙や兼敦などの活躍もあつて吉田流がだんだん優勢となつてくる。尊卑分脈などに見る吉田流を本流とし、平野流を傍流とする系図や、それに更に梅宮流、栗田官流を加えた系図は、このような事情のもとで、吉田流の者によつてあまれたものに違いない。ト部系図が尊卑分脈のように吉田流、平野流だけを記載し、註記の官位なども低く、記録に忠実で、比較的古い形を残している部分（前田本など）が平野、吉田の社務職を相承した者の略系であるのもそのような事情をうらづけるものではなからうか。

その後何度か書きつがれてゆくうちに

兼名—兼頭—  
          兼雄  
          兼好

の系図も書き込まれるに至る。この時代のものは他の庶流は全く書き込まれていないのに兼名以下兼好兄弟の系図だけが特別のように

出てくる。それは慈遍が神道では重要な、すぐれた人物であつたこともあるが、兼好の註にあるように、二条流の歌人としてではなく徒然草の作者として有名になつた兼好がト部出身であることを誇りとする事ができるようになつたためではなかつたかと思われる。それが書き込まれた時期については萩原龍夫氏が群書解題ト部系図ですでにふれておられるが、国史大系の尊卑分脈によると、前田本では平磨以下は附箋によつて吉田流は兼富（永享十年十月廿二日没）まで、平野流は兼内まで終つており、これは永享十年（一四三八）以前には成立していたものと見てよいと思われる。これには兼名流の兼好父子兄弟の系図はないが、脇坂本、前田一本、内閣本、群書類従所収ト部系図になると豊宗以下吉田流は兼見まで、平野流は兼隆までと、この兼名流兼好父子兄弟の系図が附箋としてではなく、附載されるにいたる。

神祇大副となつたはずの吉田兼満及び平野兼隆の註記は「神祇少副」となつており、兼隆の父兼永の註は「正三位神祇大」とある。「兼永が正三位神祇大副となり、しかも兼満、兼隆がまだ神祇少副だつた大永三年（一五二三）頃にこの系図が成立し、その後、兼右兼見の二代は書きつがれたものであろう」（群書解題ト部系図）とされた萩原龍夫氏の見解は当を得たものと思われる。

藤原公賢によつて編まれた最初の尊卑分脈にはト部系図は全くなかつたのが、永享十年（一四三八）頃までには平磨以下のト部系図が附箋としてつけ加えられ、大永三年（一五二三）頃までに兼名流の兼好父子兄弟の系図もあわせて直接書き込まれるにいたる。藤原氏系図（尊卑分脈）が梵舜などをはじめ、ト部氏の一族の者によつ

て書写校合される機会も多かったから、今までなかったものを新たに書き込むことも決してむづかしいことではなかったはずである。このような成立過程をたどったとすると兼名以下兼好父子兄弟の系図の書き込まれた頃は、今日からみれば相当史料もそろっていたとは思ふが、すでに可なりの年月が経過しているうえに、当時庶流としてはほとんど問題にもしていなかったと思われる兼好父子についての史料はきわめて少なかったのではなからうか。これより時代は下るが、兼右自筆の雑記に

兼茂——兼直——当流 参南朝 俗名兼清  
兼名——兼雄——兼頭 慈遍 慈遍ノ子  
他人ノ子 神風記モ慈遍ノ作ゾ  
ニ成玉フ

というト部系図に見るものとは違う変わった系図を記録している。兼雄の位置がおかしく、何によるものかわからないが、何か古い記録類の中から書き抜かれたものであろう。このようなものが記録されていることから考えると、この兼右の時代でさえ兼名流のことははっきりしていなかったのではないかと思われる。従ってト部系図に書き込まれたものも絶対のものではなかったのではないかと疑われるので、もう一度史料にあたって検討してみたい。

## 二 兼名について

吉田家日次記応永七年四月一日条は流布本には欠けているが、鈴鹿家にあった抜書によって知ることができるとして西田長男氏が紹介された部分を少し長文であるがいろいろ重要なことを含んでいるので再録してみたい。

応永七年四月一日丙申、天晴、孟夏朔、幸甚々々、御請文、

被<sub>レ</sub>仰下<sub>二</sub>旨跪以奉了、

ト部兼久将監事、能登国人、今日参役事、田舎候之間、不可<sub>レ</sub>叶之由被<sub>レ</sub>申候上者、平野臨時祭御<sub>ケイ</sub>禊可<sub>ニ</sub>沙汰<sub>ニ</sub>進<sub>ニ</sub>代官<sub>ニ</sub>候、但右幕下如<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>申候<sub>ニ</sub>者、姓者不<sub>レ</sub>限<sub>ニ</sub>一流<sub>ニ</sub>、兼字諸人用<sub>レ</sub>之、三流之外不可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>兼字<sub>ニ</sub>之条、不<sub>ニ</sub>存知<sub>ニ</sub>云々、此条以外参差驚存候、凡姓者不<sub>レ</sub>限<sub>ニ</sub>一流<sub>ニ</sub>之条雖<sub>ニ</sub>勿論<sub>ニ</sub>候、(当氏事古今各別謂候)、将亦兼字不<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>入他姓<sub>ニ</sub>事候、限<sub>ニ</sub>ト部<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>兼字<sub>ニ</sub>者御沙汰事旧候畢、所以者何、天兒屋根尊十二世孫雷大臣命、仲哀天皇御宇、奏<sub>ニ</sub>食国之政<sub>ニ</sub>、習<sub>ニ</sub>太兆之道<sub>ニ</sub>、達<sub>ニ</sub>龜卜之術<sub>ニ</sub>、賜<sub>ニ</sub>ト部姓<sub>ニ</sub>、諸姓之元始候胤亮印位相当載而明白也、彼命八世孫常磐大連公 欽明天皇御宇、改<sub>ニ</sub>ト部<sub>ニ</sub>賜<sub>ニ</sub>中臣姓<sub>ニ</sub>、彼公四世孫大織冠同五世孫意美麿 天智天皇御宇、改<sub>ニ</sub>中臣<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>賜<sub>ニ</sub>藤原姓<sub>ニ</sub>、文武天皇戊戌歲意美麿改<sub>ニ</sub>藤原<sub>ニ</sub>、復<sub>ニ</sub>中臣<sub>ニ</sub>、続日本紀日、文武天皇二年八月戊子朔丙午詔日、藤原朝臣所<sub>レ</sub>賜之姓、宜<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>其子不比等<sub>ニ</sub>承<sub>ニ</sub>之、但意美麿縁<sub>ニ</sub>供<sub>ニ</sub>神事<sub>ニ</sub>宜<sub>レ</sub>復<sub>ニ</sub>旧姓<sub>ニ</sub>云々、意美麿四世孫右中弁知治麿男平麿 齊衡三年改<sub>ニ</sub>大中臣<sub>ニ</sub>賜<sub>ニ</sub>旧姓<sub>ニ</sub>ト部<sub>ニ</sub>、文徳実録日、平麿者幼而習<sub>ニ</sub>龜卜道<sub>ニ</sub>、為<sub>ニ</sub>神祇官之ト部<sub>ニ</sub>、承和之初遣唐使、以<sub>ニ</sub>善<sub>ニ</sub>ト術<sub>ニ</sub>備<sub>ニ</sub>使云々、建保二年十一月十日兼<sub>ニ</sub>衡字<sub>ニ</sub>兼茂兼<sub>ニ</sub>往<sub>ニ</sub>兼直連署之奏状云、仲哀天皇御宇、始祖雷大臣命達<sub>ニ</sub>龜兆術<sub>ニ</sub>、賜<sub>ニ</sub>ト部姓<sub>ニ</sub>、中臣始祖常磐大連公者彼八代孫也、右中弁大中臣知治麿男ト部平麿、嗜<sub>ニ</sub>本業<sub>ニ</sub>、帰<sub>ニ</sub>本姓<sub>ニ</sub>之後、彼子孫雖<sub>ニ</sub>輕賤<sub>ニ</sub>、伝<sub>ニ</sub>箕裘<sub>ニ</sub>、励<sub>ニ</sub>夙夜<sub>ニ</sub>、意美麿男右大臣清麿公嫡男大将諸魚者、平麿之祖父也、

次男大判事今鷹者、大中臣之元祖、祭主之流々悉彼後胤也、平鷹  
 五世孫兼忠字宿禰嫡男兼親兼右次男兼国兼右相分兩流候、兼親  
 猶子兼季字梅宮社務候、彼孫兼仲之時、号ト部二者為相統  
 ト術之業也、不レ伝ニ龜ト不可レ稱ニ兼字ニ之由、御沙汰落居候  
 畢仍彼子息仲遠以來代々用ニ仲字ニ候、當時仲有候、兼国曾孫兼  
 友次男兼清菜田官社務相統之間、三流之外不レ可レ稱ニ之条、梅宮之  
 傍例分明候、兼字事於他姓者不レ可レ依ニ貴賤尊卑ニ、不レ可ニ自專  
 任ニ之条、不レ能ニ右右ニ候、於ニ當氏ニ者一社之惣官猶以曇祖依ニ申  
 子細ニ被レ正ニ之了、凡非平鷹後胤稱ニト部ニ之条、更不ニ存知ニ候、  
 母年除目當氏長者不レ拳ニ申ニ之入ニ勘文ニ哉否可レ被レ尋ニ仰外記ニ候  
 歟、勢州号ニト部ニ之輩者、曇祖兼直朝臣舍弟兼名之後葉候幣使之  
 時為ニ代官ニ沙汰進候、雖レ然不レ号ニ兼字ニ候、齊宮宮主之時當氏長  
 者拳申候、代々用ニ長字ニ候、建武度長員候、為ニ向後ニ堅可ニ申入ニ  
 所存候、所詮當氏無レ人如ニ今者ニ、兼熙（父子之外無ニ家業之相  
 統ニ器用之仁出來候者、氏之繁昌尤以庶幾仕候、於ニ今夜ニ者不レ  
 可レ賴御事候、六月十二月御躰御ト之時、氏輩悉參ニ集神祇官ニ、  
 帶ニ一官ニ之輩所勞故障之時、沙汰進ニ代官ニ候、自ニ朔日ニ至ニ九  
 月ニ毎日執行候、兼名仁治寛元之比、奉ニ公關東ニ在国之間、猶用ニ  
 代官ニ了、六月以前令ニ上洛ニ之旨可レ被レ仰下ニ候為ニ後勘ニ及ニ承  
 細候、恐存候、得ニ御意ニ可レ被レ披露ニ給ニ、恐々謹言、

四月一日

兼熙

大藏卿殿

兼季者右幕下久行高祖父也、非ニ撰家ニ雖可レ被レ載ニ名字ニ、此御  
 請文可レ被レ遣ニ被卿ニ之間、如此被レ載了、（昭和十三年十一月十

二月歴史地理所載「吉田神道の成立期に就て」）

これによると、「兼」の字はト部氏にとっては重要な意味を持ち  
 、吉田、平野、栗田宮三流の龜トの術を伝える者にかぎり使用する  
 のだと主張している。これが兼名兼顯兼好の頃からすでに意識され  
 ていたものかどうかはわからないが、ト部兼一と名のる以上は、龜  
 トの術を伝えており、神祇官人としての生活を一応経験したものと  
 考えてよいのではないかと思われる。

兼名は「兼好の周辺」（文学37年10月号所載）ですすでに紹介した  
 ように、惟賢比丘筆記付雑抄（内閣文庫所蔵）に

一、日本紀講例 兼隆十九年曇祖神祇大副兼国於中國者姫講於関  
 東者吉田流之曇祖兼直之第兼名下ニ着彼地ニ而弘之有南朝兼満七代  
 曇祖兼豊後醍醐天皇伝受之而後、神道弘者無之矣

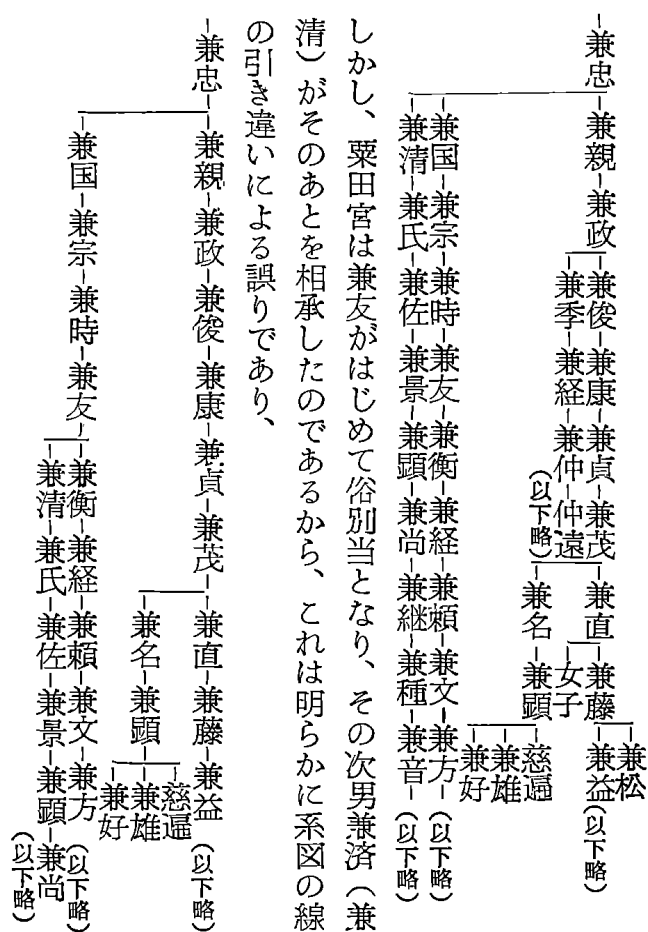
とあり、またこの吉田家日次記によれば、兼名は仁治、寛元の頃関  
 東に奉公していたために代官を任じたところから、この前後は京都  
 にあって神祇官としての生活があったはずであるが、どちらかとい  
 えば日本紀講例にあるように、関東に住むことが多かったのではな  
 いかと思われる。兼好が関東との関係が深かったのもこれによるの  
 であろう。更にこの吉田家日次記によれば、勢州に兼名の子孫と称  
 するものがあり、伊勢に公卿勅使が派遣されるさい副使の代官に任  
 ぜられたとあるので、兼名の子孫は勢州に住みついたものもあつた  
 のであろう。しかもそれは「不レ号ニ兼字ニ」とあるから、兼名一兼  
 顯一兼雄の線は、兼熙の解釈に従うかぎり、まだ龜トの術を伝えて  
 おり京都を中心に生活し、吉田神道（この頃すでに神道といえるよ  
 うな整っていたものであるかどうかはわからないが）と深い関係を

持っていた人間と判断してよいと思う。

### 三 兼頭について

兼頭のことは「兼好の周辺」ですでに述べたように、後宇多天皇の宮主だったト部兼頭は勘仲記、万一記、師守記などにその名を発見することができる。尊卑分脈のト部系図に従うかぎりそれで十分であるが、梅宮流、栗田官流の系図をのせているト部系図（内閣文庫所蔵のもの等）や吉田家譜によると、ほぼ同時代に栗田官流にもう一人のト部兼頭がいたことがわかる。

内閣文庫所蔵の「ト部系図全」は和学講談所蔵書目録の中にあるものであるが、これによると兼忠以下は次のようになっている。



とする吉田家譜の方が正しい。

これによると、兼好の父兼頭（治郎少甫従五位下）と、栗田官流の兼頭（正四位下栗田官俗別当）はほとんど同時代に生きていたと考えられるが、これが二人の別々の人物であったのか、同一人物なのか大きな問題となってくる。宮主秘事口伝によれば、栗田官流の兼佐の推挙により、後宇多天皇の宮主となり、皇后宮宮主をもかね、正四位下神祇大副となり、吉田家日次記（応安四年十二月二日条）に延慶の頃「氏之長兼頭」とあるのは、あきらかに栗田官俗別当の兼頭である。

吉田家日次記永徳三年六月十九日条には

兼種宿禰申栗田官俗別当譲与嫡男兼音事先々 仙洞御政務之時被下 綸旨之上者任兼種宿禰譲不可有相違之由可書遣 綸旨於兼音之由可仰家房

とあるし、又応永十年十二月七日条には

兼尚者兼種宿禰千時祖父也

とあるから兼尚——（兼継）——兼種——兼音は父子の關係で続いていたことがはっきりしている。従って栗田官流も原則としては世襲相承であったと思われる。しかし平野流の兼文が吉田流の兼直の子供であるのと同じように兼音のあとをうけついで兼卿は兼音の弟であることなど考えてみても、この栗田官流も吉田・平野流などと同じように社務職相承の系譜であったと判断される。兼尚以前のことは全くわからないが何らかの事情によって、兼好の父兼頭が栗田官俗別当になったとしても別に不自然ではないし、兼好の家系を知るために求められた兼名流の兼頭と、栗田官の俗別当職相承系譜の上にかんできた兼頭が同一人物であるにもかかわらず別々に記録された

ということは当然ありうることである。

兼名―兼頭―兼雄の線が庶流であるにもかかわらず兼の字を用い、兼名は関東で日本紀講を行い、又神道を弘めていた人であり、兼頭の子兼雄も延慶の頃花園天皇の宮主であり、文保の頃宮主代を勤めた人とすれば、兼頭も恐らく神祇官人としての生活を送った人であろうと思われる。系図に註する官位が多少違うが、系図の成立の過程から考えて、兼名流の系図の註記は絶対的なものではないように思われるので、だわる必要はないとすると、同時代に同族の中で同じような生活を送っていた兼頭が二人いたとするよりは同一人物とする方が自然ではないかと思われる。

兼頭は恐らく関東にあって活躍していた兼名の子として関東に生まれ、やがて上京して当時氏長者だった粟田官流の兼佐の推挙により宮主となり、更に粟田官俗別当の職にもつくことができたのではなかったらうか。

天理大学図書館所蔵の「秘事口伝慶長新写上下」は慶長十七年十月十一日古本がいたんだため写本を作った旨元文元年の卜部兼雄の奥書があり、宮主秘事口伝の写本としてはもっとも古いものと思われるが宮主所役の条に、

補任之

宮主正六位上行大学助卜部宿称兼頭但当日召仰無沙汰後  
日被下御教書

とある。これは龜山院と後宇多院の間にあるが、前後の關係から後宇多天皇の宮主のことと判断すべき所である。しかし兼頭なる人物は他のいかなる系図にも記録にもあらわれてこない名前であり、しかも後宇多天皇の宮主は勘仲記によれば卜部兼頭であったはずであ

るから、原本を見ることができない以上断言はできないが、頭と頭は非常にまぎれやすい文字であるために、慶長十七年に最初に写本が作られた際、兼頭とする所を兼頭と書写誤りをおかしたのではなかったかと思われる。

吉田家日次記応安四年十一月廿五日条に

予申云由奉幣事大略申領狀畢可被副例幣之由有其聞然者余可申所存也其故者去延慶由奉幣之時依被副例幣宮主兼雄大学大副殿末子勤仕畢所詮於由奉幣事者已申領狀畢被副例幣者就例幣奉行可申所存者尚書云、誠其謂候所詮可存知云々

とあり、兼雄の父は大学大副殿といわれていたことがわかる。恐らく大学助正六位で宮主となり、その後大副となつてからは、大学大副殿とよばれていたのであらう。

大副といわれる人は卜部氏の中でもそうおおぜいたわけではなかったから、氏長者となり、粟田官俗別当となつた正四位下神祇權大副卜部兼頭が大学大副殿といわれた兼雄の父であつたとした方が自然ではなからうか。

兼俱の文明十三年聞書に

仏ハ畢竟神ソ、祖流（○庶流？）カネアキカ心得ハチトセバイゾ  
（妻）  
ナウ祖兼ナウノ立「ツル」ハチトヒロイソ

とある「カネアキ」を萩原竜夫氏は明らかにされていないが（中世祭祀組織の研究「吉田神道の發展と祭祀組織」）、このカネアキも兼雄の父兼頭ではなかったらうか。それは勿論のちの吉田神道といわれるような整つたものではなく、主として禁忌に対する態度や解釈、あるいは日本紀等の古典に対する解釈に関するものであ

ったとは思うが、兼名のあとをうけて一家説をなしておったのではないかと思われる。

#### 四 兼雄について

兼雄のことは「兼好の周辺」で、応長元年十月二日神祇官宮主正六位上卜部宿禰兼雄、文保二年六月廿九日宮主代兼雄、貞和四年十月廿七日宣旨 従五位下卜部兼雄 宜令補宮主職」と宮主秘事口伝にあることによってその姿をとらえておいた。

吉田家日次記応安四年十一月廿五日条に

去延慶由奉幣之時依被副例幣宮主兼雄大学大副殿末子勤仕畢

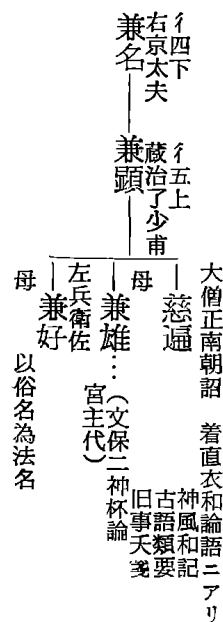
とあり同年十二月二日条に

兼彦宿禰記者延慶由奉幣同例幣使卜部權大副兼夏宿称勤仕干時宮主兼雄別而不勤使蒞候分明候哉云々此条彼度宮主勤仕之条勿論也宮主兼雄者年少之間每事故伊賀大副殿夏相替被申沙汰畢仍氏之長兼頭与大副殿相論委細記録分明也

とある。年少の兼雄に対して、いつも故伊賀大副卜部兼夏が代ってその役をつとめていたことが述べてあるし、兼雄は「大学大副殿末子」と註されており、大学大副殿を兼頭とすることが許されるならば、弘安六年に生まれたといわれる兼好や、延慶四年にはすでに阿闍梨として門葉記にその名が見える慈遍の末弟としてふさわしい年頃である。

天理大学図書館所蔵「唯一神道名法要集」に卜部系図が付せられているが、それにはいろいろな書き込みがしてある。恐らく徳川時代には卜部氏の誰れかによって書き込まれたものと思われるが、兼名

流の系図には右のような註が付してある



よくしらべてみると、例の園太曆仮託の偽文書によって書き込みをしている所もあり、注意して見てゆかなければいけないが、吉田家の文書はまだそっくりそろっていて、今日からみればはるかにいろいろ史料もそろっていたであろうこの時代においてすら、兼名流の兼好父子兄弟はこの程度しかわからなかったこと、そして、兼雄を文保二年宮主代を勤めた人であったと判断したことなど面白いと思う。

「兼好の周辺」では、貞治四年宮主に補せられた兼雄を同一人物と解したが、吉田家日次記によれば

貞治五年七月十六日

權禰宜散位正五位下卜部宿称兼雄

をはじめとして、平野社權禰宜兼雄の名は応安四年までの日次記（兼熙記）にしばしばその名を発見できる。貞治五年七月十六日の「雷公落當社樹木事」には、平野社預正四位上行神祇大副卜部宿禰兼前、權預散位正四位下卜部宿禰兼繁、禰宜正五位下行縫殿頭卜部宿禰兼熙の次に署名しており、庶流としては相当高い地位にあり、しかも散位となっていることなど考えあわせると、かなり老齡

であつたような気がする。

貞治五年十二月十八日

今日此亭月次和歌会也新大卿冬頼朝臣兼雄此四五年予同宿重光等也  
とあり

応安四年十二月廿日

雪積一寸折薊北小路大副逼留密々和哥一続百首帳行兼雄宿禰并常  
成有此席終夜披講其後一折也但大副禰急事自昼歸畢了

とある。貞治五年十月十四日の日記によれば、冷泉前宰相為秀卿  
や頼阿及びその子経賢僧都などと和歌を詠んでいる吉田兼熙のもと  
に、四五年身を寄せて、ほとんど行動をともにしている兼雄の姿が  
うかび上ってくる。延慶の頃年少であつた兼雄ならば応安四年頃  
には七十歳代であつたはずであるから、その兼雄の晩年の姿であつた  
ような気がする。しかし同じ筆者兼熙によつて

貞治五年十月廿三日

壬申天晴今日朝教房并大夫堅者賢朝兼雄舎弟兩人同時持来一獻早仍刑  
部終日及大飲了

と記されており、この兼雄には賢朝阿闍梨という舎弟があつたこと  
が知られる。延慶度の宮主兼雄は「大学大副殿末子」であり、この  
兼雄には舎弟がいることをどう考えたらよいのだろうか。もし同一  
人物とするならば、兼雄は大学大副殿の末子であり、その母は再婚  
でもして、兼雄の舎弟賢朝を産んだとでも解すべきであらうか。

これを二人の別々の人物としたところで、兼好の兄兼雄は兼好の  
弟とすべきで、延慶度宮主、文保二年宮主代をつとめた人であつた  
ことはまちがいないと思われる。

系図の上からは兼雄は兼好の兄となっているが、前述したよう  
に、兼名流の系図はその成立の時期からみてもかなり後世であり、  
不確実な点も残っており、兼右自筆雑記の中に記録されている兼名  
―兼雄―兼頭―慈遍という系図もあることなどともにあわせて考  
えてみるべきである。

兼名―兼頭―兼雄の真直ぐ結ばれた線は、兼名より慈遍にいたる  
ものとともに神道を伝えた系譜としてたどられたものかもしれない。  
この時代には、神祇に関するかぎり、ある程度のことは知りう  
る史料はまだ残っていたに相違ない。そしてその兼頭には兼雄のほ  
かに慈遍と兼好がいたという伝承によつて適当に書き加えられたも  
のではなかったかと思われる。この兼好の弟兼雄が宮主としてお仕  
えした花園天皇が御譲位された時のことは徒然草第二十七段に書か  
れているが

今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞさびし  
げなる。かかる折にぞ人の心もあらはれぬべき  
とはげしいいきどほりを感じているような物の言い方をしているの  
も納得できるように思われる。

## 五 慈遍について

本朝高僧伝卷十七には

江州睿山沙門慈遍伝

釈慈遍。京師人。吉田卜部兼頭子。兼好弟也。弱登睿峰剃髮稟  
戒。近ニ事碩匠。学ニ天台教。又以ニ世業ニ精ニ博神書。後醍  
醐帝召問ニ仏法神道。常在ニ南朝ニ任ニ大僧正。遍著ニ神風和記ニ



卷一。世人玩之。不詳其卒二矣。

とあり、群書一覽卷一には

旧事玄義写本十卷同上

旧事記の抄なりこの書体天台の妙玄義の格なり此書の中に会釈了簡開合如来などいふ仏語あまたに在故常の神書の例にてハときがたし慈遍ハ伊勢長官の末子にして伊勢流の神道を伝しとも云又兼好の従弟にして卜部の伝を伝へりともいふとある。

兼右自筆の雜記の中の系図の註によれば、俗名兼清といい「他人ノ子ニ成玉フ」とあるから、それらをあわせ考えてみると、俗名卜部兼清は伊勢長官（出家後慈遍は宮内卿を名乗っているから恐らく宮内卿ではなかったかと思われるが）の猶子となり、出家して慈遍と号したものと思われる。

実衡公記正和四年四月廿八日条の水天供の交名に座主宮慈遍の名を見出すことができ、「兼好の周辺」では尊卑分脈によって、この慈遍を兼好の兄と考え、慈道親王の手代として登壇したのではないかと解釈したが、「門葉記」によると、延慶四年三月二十七日の尊勝陀羅尼供頼に慈遍阿闍梨の名がすでに見え、文保元年律師、嘉暦二年に権少僧都、建武二年十二月法印となつてゆくが、正和四年にはまだ阿闍梨であり、この慈遍を同一人物とすると、慈道親王との関係は深かつたであろうが、手代りとして登壇するにはあまりにも若く、また地位も低くすぎるから、正和四年四月二十八日の水天供はやはり慈道親王の親修であつて、実衡公の書きまちがひであつたと判断すべきであり、むしろ慈遍は実衡公にそのような記録誤りを

おかさせる位よく名前を知られている親しい間柄であつたか、その当時強い印象を与えていた人物であつたと解釈すべきであろう。

松本彦次郎氏は慈遍について「日本文化史論」で次のごとく書いておられる。

彼の最も親しかった友に檜垣（度会）常昌がある。常昌は後醍醐天皇の幕府討倒の御計画の始めから之に加わつたらしく彼は元徳年中慈遍の著神懷論成つた際、慈遍に代りこの書を天皇に奉へたら天皇は御挙兵の御企てあり、將に叡山に行幸し給う勿卒の際にも拘らず叡覽あらせられ綸旨を賜はり御祈りのことを慈遍に命じ賜つた。その後天皇は隱岐に遷幸あそばされたが、この間に常昌は皇道の廢れん事を嘆いて慈遍にすすめて神道書を書くことをすすめた。元弘二年慈遍が旧事本紀玄義を完成した時、その序文として「神道書紀縁起」（旧事本紀玄義の別名？）の序をかいた。

曰く、「夫神之為神先天神之神也。道之為道超乾坤之道也」と、我國に於いて神が天地に先きだつて現はれたまひ、神ながらの道も乾坤を超越したものでありとし、仏教の玄極により、神道の幽致を述べること累祖の伝来と異ずとし、更に慈遍の学徳の非凡ならざるをはめたへ、慈遍は神の加護を蒙り、神道に妙通すると論じ、彼に囑して玄疏十巻を著作せしめたと記している。「〔歴史教育講座第一部理論篇〕日本に於ける史学理念の展開（中世）」

このほかにも慈遍は「天地神祇審鎮要記」をはじめ神道関係の著作をいろいろ残しているが、元弘の乱前後に書かれたものが多くように思われる。恐らくそれは時代的要求でもあつたに違ひな

い。そして、それが元弘の乱中は討幕運動のイデオロギーとなり、更に南北朝の混乱した時代にあつては南朝に対して一種の精神的な支えとなつたために、尊卑分脈に「南朝詔直衣、大僧正」と註記され、本朝高僧伝には「常在<sub>三</sub>南朝<sub>二</sub>任<sub>三</sub>大僧正<sub>一</sub>」と記されて南朝と特別深いつながりがあつた人のように考えられてきた。しかし門葉記によるかぎりそれらとはかなり違った慈遍の姿が浮び上ってくる。これを同名異人とすれば話は別であるが、恐らく同一人物だつたと思われるので今しばらく、門葉記によつて慈遍の姿を追つてみたい。

延慶四年三月二十七日持明院殿で前大僧正公什を導師として行われた尊勝陀羅尼供養に讃衆十口の中に「慈遍<sup>宮内卿</sup>阿闍梨唱礼」とあり御導師自前夜参候。以文殿五間<sup>殿上</sup>下口<sup>下口</sup>為壇所題名僧之内。経円法印。覚賀僧都。実鑒律師。玄円。并讃衆九口<sup>慈遍</sup>之日早旦自壇所出仕。……

とあり、慈遍だけが別行動をとつていたことがわかる。更に讃衆十口之内。慈遍阿闍梨為北野僧正御房沙汰直出仕。車狩衣牛飼染装束。中童子力者四人等召具之。其外役人有職二人<sup>覚弁</sup>自堂<sup>兼円</sup>上出仕。……

とあり、北野僧正御房（恐らく慈嚴僧正と思われるが）のもとから出仕したもののように思われる。又

一、所作事。頃可為円親法印之处。不参之間玄円可勤仕之由被仰之。非器難治之上。縦雖形成世間利口為御願為御導師可為不便歎之由再三雖申子細。無其仁之上者只可勤仕之由。御導師并兵衛督僧正御房被計申之間難治而勤畢。然而慈遍阿闍梨為兵衛督僧正御

房弟子。又為器量相当。理運歎之由有沙汰被差定畢。所仰神妙。但作礼方便出帰命十方一切仏畢思渡歎。散花差定経然阿闍梨畢。而声為小声形為少僧。可有傍難役重疊有其例可為朝禪歎之由兵衛督僧正被申之。然而経闍梨云。唱礼云散花被改者可為遺恨之間。如元勤仕畢。……

とあり、慈遍は兵衛督僧正公尋の弟子であり、器量相当のため師公尋と導師をつとめた公什（尊卑分脈によれば公尋の弟）と相談の結果、少僧<sup>オナナ</sup>で小声だつた経然をおさえて唱礼に差定された事情がわかる。他の九口の讃衆が公什に仕える人々だつたらしいのに、北野僧正（慈嚴）に仕えていた慈遍が、ただ一人別行動をとりながら勤仕した事情はこれではっきりしてくる。すなわち、恐らく声明の師だつた公尋が、導師をつとめる弟公什に対して強く推挽したからであり、又慈遍がそれに値するすぐれた器量の若者だつたからである。

文和二年十月十六日為征夷大將軍<sup>源氏</sup>病祈。於十樂院本坊<sup>熾盛</sup>始修<sup>光堂</sup>冥道供<sup>三箇夜</sup>堂上

で助修六口の中に慈遍の名は見えないが、

一、伴僧所作事

九条錫杖者為声明隨分之秘曲。今度其仁頗可謂闕如。慈遍法印隨公尋僧正伝之。仍慈嚴僧正勤行之時。度々勤此役訖。而田舎下向之間。凌遼遠仰遣之处。難治故障云々仍岡崎桓覚法印為実鑒法印之委附此曲相伝。不能左右之間問答之处。声明事只為人師等沙汰置許也。如此所作難堪之上。近日依咳氣不可叶之由申之。仍頗無

其仁有令略歟。三箇夜勤修。而夜略之例有之。可為准拠歟。凡九条錫杖用否隨時事。本私記文也。然者非可必然哉之由存之。但此供此曲為詮要。近例又一向令略之条不分明之間。重相談桓覺法印之処。可召進桓惠法印之由申之。仍召加彼法印畢。

とあるように、声明の秘曲といわれた九条錫杖を公尋僧正から伝えられており、慈嚴僧正が勤行されるときは度々この役を勤仕したとあり、冥道供には欠くことのできない大切な人物だったために、當時田舎に下向していた慈遍を遼遠をしのいで上京をうながしたけれども、難治故障の故にやむをえず桓惠法印を召すことになったとある。その田舎が本朝高僧伝に「常在<sub>三</sub>南朝<sub>二</sub>」というように、南朝のある吉野であったのか、勢州だったのか、関東であったのか、ただ「遷遠を凌いで」とあるだけではわからない。

文和二年十一月六日為將軍息女鶴王祈於十樂院本坊熾盛光堂始修冥道

供堂上三阿闍梨座主二品尊円親王

#### 助修六口

にも同じ理由で慈遍の代りに定真が召されている。

抑慈遍法印為錫杖音頭。自田舎可召上之由内々愚狀示遣慈能僧正之処固辞之間。為彼闕召加定真法印了。錫杖事。貞和現行之時。

実鑒法印音頭之間。依為弟子令同音了。

仍今度仰音頭了。

とあり、又

慈遍法印又田舎下向之間。被<sub>レ</sub>請定真法印了。

とあるから、慈遍は度々田舎に下向していたらしい。しかし

康安二年三月六日。為征夷大將軍義詮卿腫物祈。於十樂院修冥道供三箇夜

阿闍梨前座主尊道親王

#### 助修六口

法印權大僧都定真灑水。神供 光勝灑水

桓増唱礼 法印慈遍錫杖

法印權大僧都尋慶散供。饒。奉行 權大僧

都信聰燒帛。鉢

とあって法印慈遍は錫杖をつとめているからその後また上京してきていることがわかる。田舎へ下向することはあっても、やはり原則として京都を中心に生活していたに相違ない。延慶四年から康安二年まで、慈遍の勤めた役はほとんど唱礼か錫杖である。声明によほど明るいすぐれた人であったと思われる。

康安二年まで兼好が生きていたとすると八十歳になるはずであるから、この慈遍をその兄とすると八十一歳以上であったことになる。このような高齢まで度々田舎へ下向したり又桓覺法印が「如此所作難堪之上。近日依咳氣不可叶之由申之」として辞退したような声明の秘曲といわれた九条錫杖をつとめることができたかどうか疑問になる。年齢的に見て兼好の弟とする本朝高僧伝や群書一覽の説の方が正しいのではなからうか。しかし延慶四年にすでに阿闍梨として交名にその名をのせている以上は二十歳前後の青年僧であったことはたしかであろうから、その出生は恐らく一二九〇年前後であったと思われる。

溪嵐拾葉集に

密法相承審論要抄

沙門慈遍撰

慈遍聞。持明藏宗分条流伝久矣。是以仏教来辰旦。論宗於半滿。密法渡吾朝。降流隨自他。爰予訪説家之灌頂。未レ糺伝風親疎。訪衆師之印信。未レ審真言之淺秘。仍知識之所了。題八十箇微管之所及集為一卷。抑改起説聞。悲有差謬。謹讓後賢。故怖添削。

とあり、密教にも明るい人だったように思われる。

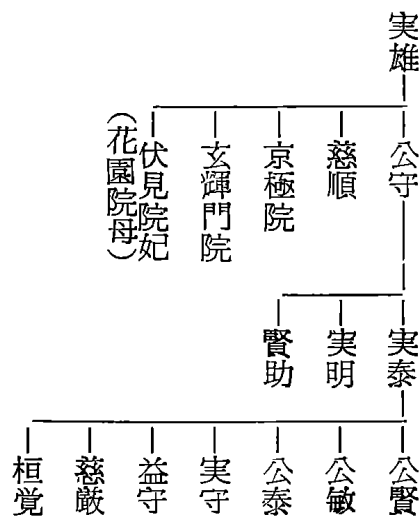
慈遍の師匠公尋は有名な道玄の孫弟子であり、そんな関係からか同じ道玄の弟子慈徹僧正や慈道親王と特に関係が深かったようである。

元徳元年胎界、元徳二年金界はともに慈道親王が無動寺に居られて青蓮院は御留守になったが、その間、交名に見る顔ぶれはすっかり変っており、それまでずっと見えていた慈徹も慈遍の名も見えない。恐らく慈遍は慈徹とともに慈道親王と行動をとにしたためと思われる。

龜山天皇の第十六皇子慈道親王や、足利尊氏が南朝に下った正平六年、南朝によって天台座主に任命され、南朝敗退後、すぐに座主を辞せざるを得なかった慈徹僧正などとともに慈遍も感情的には南朝に心をよせていたこともありうるが、本朝高僧伝に「常在南朝任大僧正」とあるのは何によったものかわからないが疑問である。八十歳近い高齢であったはずの康安二年に法印と見えるから、慈遍は法印で生涯を閉じたものと思われる。正平六年慈徹僧正が天台座主に任じられた頃にでも南朝から大僧正に任じられたことがなかったとは言いきれないが、門葉記によるかぎり大僧正になったという記録はない。

足利尊氏やその息女鶴王、或は足利義詮のための御祈りなどにその名が見える以上、「常在南朝」というようなことは考えられない。京都を中心に生活する以上はいや応なしに権力者につくか、それに逆らわない生活をしていたものと思われる。そこには兼好と高師直との関係に似たものがあつたかもしれない。

慈遍と深い関係をもっていた慈徹僧正は尊卑分脈によると



となっており、徒然草第一〇二段に見える公賢は慈徹の兄であり、同じく第二三八段に見える賢助僧正は慈徹の叔父にあたる。又第八三段に見える実泰は慈徹の父である。

又兼好自撰歌集に

青蓮院二品親王より花契多春といふ事をよませられ侍りにくれ竹の園生にはふ花にこそ千代の春しる色はみえけれど詠んでいる。この青蓮院二品親王（慈道親王）は慈遍がお仕えした人である。

兼好自身四天王といわれた二条派の有名な歌人ではあったが、歌

を通してよりもむしろ慈遍を通じてこれらの人々と交渉をもつきっかけが与えられたことも多かったのではなからうか。

風巻景次郎氏が「兼好の社会圈」で推定されているように、兼好が久我家堀川具守の家司だったことを否定する史料は一つもないしそれが正しいのではないかと思われるが、徒然草などにはそれに劣らずたくさん名前も出て来て関係の深かったことを思わせる西園寺家（特に洞院家）は慈遍の社会圈とすべきであろうか。

慈遍と兼好の交渉を知る手がかりとなるようなものは全くないが、この門葉記によって浮び上ってきた慈遍を本朝高僧伝や群書一覽の説のように兼好の弟とすることができるとなれば、兼好の社会圈が慈遍の社会圈と考えられる部分に相当広がり、重なりあっている以上は、兼好の生活の上にもいろいろの交渉をもっていたのではないかと思われる。

（昭和29年度本学仏教科卒・新潟県北越商業高校教諭）

## 昭和38年度卒業論文題目一覧

西行法師の研究	赤塚英美子	新内節の歴史の変遷	桜庭 涼子
近松門左衛門の世話物に於ける思潮	浅見 好子	日本文学と天皇	塩田たい子
日本演劇の伝統と新劇	伊部 秀峰	日本文学における美の理念について	清水 郁雄
良寛の歌について	石黒 亮子	幽玄研究	菅 南子
源氏物語について	岩井 正志	高橋虫麻呂の研究	鈴木 得能
国語系統論の研究	岩間 光弘	平家物語に於ける武士精神	早田 嘉範
兼好法師の研究	姥 英成	讃岐典侍日記の研究	高橋 淳
芭蕉研究	江口 哲生	源氏物語における引歌について	田中 聰子
世阿弥の能楽論	大村 豊隆	西鶴の好色一代男の研究	田中 大孝
上代文学における生と死の世界	大波多 海	川柳について	津久井道雄
詩誌「赤と黒」の研究	岡部 勝司	日本永代蔵の研究	寺坂 邦雄
日常語化した仏教語彙の研究	片山 晴賢	塩飽諸島方言	中土井清香
「女大学」研究	鴨志田 淳子	枕草子の研究	萩原 道鶴
平安朝歌謡の研究	草薨 高興	西行の研究	木下 進
更級日記の研究	小林 達子	幽玄の研究	牧野 泰男
在原業平の研究	近藤 杏邨	東関紀行の研究	村上 泰賢
西鶴の研究	佐原 作美	方丈記研究	吉岡 紘一